

出張報告

報告日 令和7（2025）年11月4日

会派名	公明党
報告者氏名	眞貝維義、西川弘美
種別	<input checked="" type="checkbox"/> 調査研究 (<input type="checkbox"/> 行政視察) <input type="checkbox"/> 研修会 <input type="checkbox"/> 要請・陳情 <input type="checkbox"/> 各種会議
用務	泊原子力発電所視察
日時	令和7年10月21日（火）9:30 ~ 同日 12:00
場所 (会場)	北海道電力(株)泊原子力発電所 (北海道古宇郡泊村大字堀株村字山の上219-1)
調査項目等	再稼働を巡る現状、安全対策、地元への説明
概要	<p>対応者：北海道電力(株)泊原子力発電所 次長 ■■■■様 同運営課広報担当課長 ■■■■様</p> <p>・泊発電所は、北海道積丹半島南西部・泊村の沿岸部に位置する北海道唯一の原子力発電所。約135万m²の敷地面積に3基の原子炉が設置されている。1号機が1989年6月より発電を開始し、2009年12月に3号機が発電を開始した。1～3号機の発電設備量の合計は207万kWで、全3基が稼働していた際は、北海道内の需要の4割を発電していた。</p> <p>・泊原子力発電所は2027年のできるだけ早い時期に、国内で最も新しい3号機(91.2万kW)の再稼働を目指して新規制基準に沿った、津波対策をはじめ地震対策や防火対策など様々な安全対策工事の他、重大事故対策として電源確保対策や代替格納容器スプレイポンプ・水素爆発防止対策などを行っている。また、事故に対応する訓練を常時行っている。</p> <p>・2030年代前半に全3基の再稼働を目指している。</p>
所感等	<p>・敷地内における発電所敷地内断層の活動性評価において、疑念のある断層が12万～13万年前より古いことから活断層ではないと評価が認められ、再稼働への道筋が見えたことになるが、福島事故を踏まえた原子力規制委員会の活断層論議が地質学的に適正なのか、再稼働の大きな規制になっているのではないか。</p> <p>・津波対策の防潮堤工事は必要であるが、津波発生の時間が早いことから、港内の船舶が津波の際に防潮堤等を破損する恐れがあり、新たな港を建設すること。これは、北海道電力の主張が認められなかった結果であるが、規制委</p>

員会は電力会社の主張を聞き、実験をしてからの判断でもよかったですのではないか。

・当然のことであるが安全は大前提である。しかしながら、IAEAの勧告もあるが、規制委員会の審査時間の長さ及び報告書の書面の多さ。審査の効率化を図ることが必要ではないか。

・重大事故対策においては、PWRの設計からくる災害時の冷却設備や格納容器の大きさが、BWRとは水素爆発対策など、若干の違いがあるが、基本的な安全対策は同じである。

・また、真冬の事故訓練を行うなど、安全対策と同様に平時より事故訓練に取り組んでいるが、シビアアクシデント（SA）に備えたSA対応専門のSATを創設し再稼働に向け取り組んでいる。

・泊原子力発電所が、全ての安全対策を完了し2027年の早期稼働を期待する。

(眞貝維義)

泊原子力発電所安全対策として、地震対策、津波対策、森林火災・竜巻・火山への対策、炉心等冷却対策、電源確保対策、重大事故への備え、訓練の実施などについて説明を受け、構内を見学した。3号機においては、当初計画していた安全対策工事については概ね完了していたが、新設防潮堤の設置や安全対策工事については、新規制基準に則り厳格に度重なる審査を経て対応している。入り組んだ海岸線や崖、既存の道路や建造物など立地状況の関係、そして何よりこれから厳しい気候条件もあり、時間と手間がかかる工事と理解したが、会社の総力を挙げて取り組んでいることに感服した。

防災訓練では、夜間や吹雪時の参集訓練も行われていることや、シビアアクシデント（SA）に備えた体制に備え、SA対応専門のSATを創設し、再稼働に合わせて24時間体制で発電所構内に待機する態勢を整備している。

また、再稼働についての動きとしては、地元経済団体から再稼働に対する陳情が上がっており、議会で議論が進んでいる。

これらのことから、北海道電力株式会社の努力が早期の再稼働という結果に結びつくことを期待したい。

(西川弘美)



会派名	公明党
報告者氏名	眞貝維義、西川弘美
種別	<input checked="" type="checkbox"/> 調査研究 (<input type="checkbox"/> 行政視察) <input type="checkbox"/> 研修会 <input type="checkbox"/> 要請・陳情 <input type="checkbox"/> 各種会議
用務	余市町議会公明党議員意見交換
日時	令和7年10月21日(火) 13:30 ~ 同日 15:00
場所 (会場)	余市町議会（北海道余市郡余市町朝日町26番地）
調査項目等	避難計画・防災ガイドブック、原発再稼働と地域振興の動き、地元同意について
概要	<p>対応者：余市町議会議員 寺田進様</p> <p>余市町は、町全体が泊原子力発電所のUPZ圏内にあり、平成30年に改訂版、「原子力防災のしおり」を策定した。この「原子力防災のしおり」は、複合災害時の対応や避難退避時検査場所など、新たな防災情報が盛り込まれた。</p>
所感等	<ul style="list-style-type: none"> 原子力災害時の避難計画においては、町には行政防災無線が無いこと、観光客の多さ及びインバウンドの多さから情報の伝達が最重要課題であり、防災対策として行政防災無線の配備は喫緊の課題との事であった。全国のPAZ・UPZの状況を国は把握しているのかとの疑念を持った。 地元同意については、住民の関心はそんなに高くない。原子力発電所に近いところは関心が高いが、余市町では電気料金など物価高に貢献する再稼働は容認するのではないかとの事であった。 再稼働に向けて安全対策や避難計画について、国・道・事業者が丁寧な地元説明を行って欲しいとの意見には共感を持った。 <p style="text-align: right;">(眞貝維義)</p> <p>余市町の「原子力防災のしおり」の説明や道主導で行っている防災訓練や、余市町民の原発に対する意識傾向などを伺った。</p> <p>寺田議員としては、原子力災害時の広報について、余市町には防災行政無線がないことから、情報が届かない、いわゆる災害弱者に対する課題について危惧されていた。柏崎市の防災行政無線や情報伝達について情報提供し、国との連携についても意見交換できた。</p> <p style="text-align: right;">(西川弘美)</p>



会派名	公明党
報告者氏名	眞貝維義、西川弘美
種別	<input checked="" type="checkbox"/> 調査研究 (<input type="checkbox"/> 行政視察) <input type="checkbox"/> 研修会 <input type="checkbox"/> 要請・陳情 <input type="checkbox"/> 各種会議
用務	防災啓発施設見学
日時	令和7年10月22日（水）9:30 ~ 同日 11:00
場所 (会場)	札幌市民防災センター（北海道札幌市白石区南郷通6丁目北2-1）
調査項目等	各種災害の模擬体験設備を備えた防災施設見学 市民防災センターと防災意識の向上
概要	<p>対応者：公益財団法人札幌防災協会事務局次長 ■■■■様</p> <p>1. 建設目的 札幌市民防災センターは、「見て、触れて、体験し、学ぼう」をコンセプトとして、市民の防火・防災意識の向上を図ることを目的としている。</p> <p>2. 市民の活用 市民防災センターは、市民が災害対応能力を身につけ、万が一の際に適切な行動をとれるようになるための体験型学習施設として、幅広く市民に活用されている。</p>
所感等	<p>この施設は、地震や火災、風水害などの各種災害の模擬体験を通して、防火・防災に関する知識や、災害が発生した際の適切な行動を市民が体系的に学ぶことができるよう整備されている。</p> <p>具体的な体験学習内容は、「自分や家族と災害体験」・「子どもの防災教育」・「地域や企業の防災訓練」など学校単位や企業・町内会、グループでの学習及び研修に利用されており、さまざまな年齢に合わせてわかりやすくガイダンスが行われている。</p> <p>視察時にも家族連れや子供たち、グループの入館者が多く見られたが、入館が無料であることも入館が多い要因と考える。</p> <p>全国で、地震や台風、そして線状降水帯による水害が多発している。住民の防災意識の向上は行政課題の一つと考える。新潟県は、地震や水害など多くの災害が発生している、「おぢや震災ミュージアム そなえ館」など県内には防災学習のできる施設がいくつか在るが、柏崎市には原子力発電所もある。中越沖地震など災害の体験学習、原子力防災の学習ができる総合的な防災学習センター建設を望む。</p> <p style="text-align: right;">(眞貝維義)</p> <p>市民の防災意識の向上を図ることを目的とし、一ヵ所で様々な災害を疑似体</p>

験することができる体験型施設である。立地条件も良く、無料であるため、視察当日も子どもから学生、大人まで、多くの方が来館されていた。また、行政関係や議員の視察も多いが、最近では外国人も視察に来るとのことだった。また、館内には、災害ごとの防災マップなど、市内の全ての地域の資料が揃っており、防災に関する拠点として重要な役割を持っている。開館から22年経っているが、2年前には昨今の国内の災害の情報に合わせて設備をリニューアルしている。私自身も煙避難や暴風設備などを体験したが、知らないことが多く、知識だけではなく体験の重要性を感じた。柏崎市内でも体験型の施設の必要性を感じた。

(西川弘美)

